

## シンポジウム 「台湾の多元文化と教育——原住民族の取り組みから」

### P'uma (博屋瑪、ポウマ)

#### ——台湾初の原住民族実験小学校の始まり——

比令・亞布 (ピリン・ヤブ)

(石村 明子 訳)

はじめに

- 第1節 原住民教育で別天地を切り開いた台湾の実験教育
  - 第2節 学校の戦略
  - 第3節 カリキュラムの発展
  - 第4節 カリキュラムについて——文学、狩猟、建築の授業を例として
  - 第5節 我々の変化
  - 第6節 ポウマ小学校の成果と将来の展望
- おわりに

(要約)

2013年に故郷に戻り、原住民の校長として、長年温めてきたタイヤル民族小学校の夢を実現するべく行動を開始した。「学校型態実験教育実施条例」(2014年可決)によって、より自主的に学校経営を行うことが可能になり、2016年8月1日に台湾初の民族実験小学校が設立された。この構想を打ち出した当初は、周囲に共感と理解を求めることに努め、校名を住民投票でP'uma(博屋瑪、ポウマ)と決定した。そして、教職員一丸となりタイヤル文化を主軸とするカリキュラムを開発した。その結果、児童・教員・保護者・コミュニティに多くのよい変化が現れ、さまざまな点で大きな成果を上げるようになった。民族伝統教育は過去の教育ではなく、ルーツから出発する学びであり、自分を知り自我を完成させる学びであり、真の全人的な学びである。今日やらなければ、明日にはタイヤル族がいなくなる。これがポウマ小学校チームの共同の使命なのである。

はじめに

Psba i gaga na kinbahan, Imuhw na inlugan Tayan (タイヤル語)

(子どもたちにタイヤル文化を学ばせ、タイヤルの知恵を身に付けさせよう)。

これは、祖父がかつて私に語った言葉である。

原住民部落<sup>[訳注1]</sup>で育った私は、タイヤル文化に浸ってそれを学び、タイヤルの生活における古老たちの修養の影響を受け、古老たちを見習いながらタイヤル文化に関する知識を大いに身に着けた。しかし、故郷を離れて進学すると、学校の勉強ではタイヤルの歴史的脈絡にも原住民文化にも触れることがなく、心のなかに多くの疑問が湧いた。なぜ、教科書にはタイヤルの歴史や私がよく知るタイヤルの文化が載っていないのか…。

小学校の1年生になって、学校の先生に「どうしてタイヤル語を教えないの?」と質問し、もしかしたら中学校で教えるのかもしれないと思った。しかし、中学校に上がってもタイヤル語の授業はなく、そのうえ英語の授業まで増え、待ち望んだタイヤル語が授業に登場することはなかった。そしてカリキュラムに対する様々な疑問が湧いた。学んでいる内容はすべてまったく馴染みのない言語や知識であり、自分が一番よく知っているタイヤル文化やタイヤルの生活といった内容がなぜカリキュラムに組み込まれていないのだろう、と多くの疑問がいつまでも心のなかをぐ

るぐると巡っていた。

大学在学中は、学校の図書館でタイヤル文化関係の資料を探し、さらには他大学の図書館でも探したが、毎回失望して戻るのが常だった。そこで考えたのが、図書館で見つからないのならば、部落に戻って古老たちを見習いそこから自分が学びたいタイヤルの知識を習得すればいい、ということだった。休みになると部落で顔にイレズミのある老人を訪ねて様々な話を聞き、最も基礎となる言語やタイヤルの古謡、部落の歴史から集め始め、豊富なタイヤル語の言語資料や生活に関するタイヤルの知識、タイヤルの文化的伝統を蓄積することができた。また、この期間にタイヤルの多くの古老や影響力のある先達と知り合うことができた。そのほか、1981年に大安渓流域の青年たち仲間5人でタイヤル文化研究グループと協会を設立し、タイヤル文化の系統立った調査と整理に力を注いだ。そこで学んだ事柄を転化させて地元の子どもたちと共有するべく、タイヤル文化の特別講座を行い、さらにそれを整理して出版も行った。

タイヤル文化を推進するうちに、映像が文字よりも大きな魅力と影響力を持つことに気が付いた。そこで1996年に文化建設委員会による1年間の映像講習を受け、ドキュメンタリーの手法でタイヤル族を記録し始めた。タイヤル族のイレズミ、土地、祭儀、921地震、霧社事件、タイヤルの発祥地、タイヤルの宇宙観、タイヤルの祖霊観…など10数篇にわたるドキュメンタリーフィルムを制作し、国内で何度も最優秀賞を受賞した。また、積極的に原住民の各部落や大学でドキュメンタリーフィルムを放映し、それを鑑賞することでタイヤル族自身や大学生にタイヤル族を知ってもらい、タイヤルの伝統的文化や生活について紹介した。

2013年に故郷に戻って仕事をするようになった。原住民の校長として、タイヤルの子どもたちに何ができるか、タイヤル族の学校に何を残すことができるかということを実際に考えた。幸運にも原住民学校に戻ることができたので、長年温めてきたタイヤル民族小学校の夢を、タイヤル族民族実験小学校という形で実現するべく行動を開始した。

## 第1節 原住民教育で別天地を切り開いた台湾の実験教育

原住民族<sup>(訳注1)</sup>は現代化・主流文化が浸透し、またはそれから排除され、民族語の消失や伝統文化の衰退に直面し、文化は断絶の危機に見舞われている。原住民地区の教育政策は山地の平地化であり、漢民族文化が主要な学習内容であり、原住民を一般的な漢民族にするための教育であった。1998年の原住民族教育法公布により、原住民族教育の制定と推進における法的基礎が整った。しかし「名」が有っても「実」があるとは限らない。台湾のこれまでの教育政策はマジョリティが主導権を握っており、原住民の視点や需要には基づいてこなかった。そのため、多くの学校の原住民カリキュラムは明らかに「主体性」に欠けている。さらに、多数の西洋の学術理論が台湾で紹介されてはいるものの、学校カリキュラムの実践面においては、学術的見解との間には依然として落差が存在するようであり、小学校のカリキュラムや教育においてさえも、ほとんど関心が払われてこなかった。

実験教育三法が2014年に可決され、そのうちの1つである「学校型態実験教育実施条例」(中

華民国 103 年 11 月 19 日總統華總一義字第 10300173321 号令公布) によって、学校側が現行の法令と体制的な制限に囚われず、原住民族の実験教育という形態を採択する事が可能になり、完全な学校形態のもとで特定の理念に基づき実験教育を行えるようになった(教育部 2014)。つまり、原住民族学校では、実験教育の形を取り、十分な自主性のもと、変革を作り出す。実験教育の多面的な展開により、原住民族社会の多様な要求に応え、原住民教育改革の精神を根付かせることができるのである。実験教育三法が立法院で採決されたことで、原住民族実験小学校はよりいっそう自主的に学校経営を行えるようになった。原住民本位のカリキュラムを実施し、民族教育を素晴らしいものにすることが可能になったと言えるだろう。2016 年 8 月 1 日に台中市で台湾初の民族実験小学校が設立されることになり、教育部や原住民族委員会、県ならびに市政府の支持の下、全力を尽くして民族教育を推進することになった。原住民による民族教育の復活を勝ち取ろうとする声が重視され実践につながったことは、熱心に民族教育を行ってきた教育者やコミュニティ(社区)の古老、保護者たちをカづけ、さらなる民族教育の推進へと向かわせた。

## 第 2 節 学校の戦略

2013 年に現行の教育体制のなかで異なる教育形態となるタイヤル民族実験小学校の構想を打ち出した。教育局高官や学校職員、コミュニティや保護者がこの実験小学校プロジェクトに対して大きな疑問を持ち、なかには荒唐無稽な話だと考える人もいるだろうと思われた。私は学校の形態やカリキュラムを変更することに各方面の賛同と支持を何とか得ようとした。また次に予想される試練は、校内の先生方に反対されないだろうか、教育方式の変更により、保護者がこぞって反対したり児童を転校させたりしないだろうか、関連機関の高官に実験教育プロジェクトを支持してもらえるだろうか、実験教育プロジェクトの資金源はどうなるのか、そして最も重要なのは、タイヤルのカリキュラムが本当に作成できるのだろうか、ということだった。すべてが限りなく大きな試練であるものの、民族実験教育の可能性を広げるために、校長としていかに関係者を説得し、考え方を変えてもらうかということを考え始めた。

### 1. 共感を求める

台湾の教員養成制度の下で学んだ先生方は、原住民か否かに関わらずそのほとんどが原住民族文化の基礎や概念を持っておらず、原住民族教育の実施は、先生方にとって非常に大きな負担となった。また、現在の進学至上主義社会において、保護者の一番の関心は基本的な学力の向上と将来における競争力にある。現存の教育体制において、主流の伝統的な教育方式から原住民族実験教育という全く新しい概念へと、多くの人々の考え方を変えなければならない。当時は教育法令も全く整備されていないなか、変化を受け入れるよう説得し、明確な理念があることを理解するよう促し賛同を得る、ということが初期段階での最重要課題であった。そのため、以下のそれぞれ異なる対象に対し、異なる戦略を採った。

## (1) 教員に対して

- A. 教員たちの教育に対する初心を呼び起こし、学生がよりよい教育を受けられるよう教育方法を変える。
- B. 教育属地主義——タイヤル文化を主体とした教育という新しい考え方——を根付かせる。
- C. 会議や公式あるいは非公式な集まりを通じて、タイヤル実験教育の方向性について討論する。
- D. 特色があり理念を持つ学校を視察するとともに、台中市ならびに台湾全土で民族教育フォーラムを開催する。
- E. カリキュラム、民族学、実験教育の専門家を学校に招聘し、教員の研修を行う。
- F. 原住民部落の古老にタイヤル文化について話してもらうことで、在来の知識と原住民文化の伝統について理解する。
- G. 教員をグループ分けし、民族に関するフィールドワークを行い、民族に関する知識の基礎を固める。

## (2) 保護者に対して

- A. 保護者会会長を説得し、全面的な支持を求める。
- B. 放課後に保護者全員を訪問したり保護者の関連する集まりを利用したりして民族実験教育の理念を伝える。
- C. 国内外の民族教育に関する文献や事例を提示し保護者を説得する。

## (3) 部落やコミュニティに対して

- A. 全ての部落会議に参加し、原住民の児童たちに対する民族教育の長所を説明する。
- B. 地方の古老、部落の古老、コミュニティの理事長と民族教育について共有し討論する。
- C. 部落でタイヤル民族教育フォーラムを多数実施し、部落の古老や教育界の先達、地方議員と、原住民教育に対する民族実験教育の影響と将来性について討論する。

## (4) 政府高官（教育局、原住民族委員会、教育部）に対して

- A. 市政府高官の共感を得られるよう、2013年度に台中市民族実験教育フォーラムを行った。
- B. 2014年度に全国民族教育シンポジウムを行い、研究者、原住民教育エリート、全国各県各市の原住民の代表、中央政府の原住民族委員会の代表、教育に関心のある部落の人などが民族実験教育の可能性について検討した。

## 2. 学校の正名（学校名の取り戻し）

台湾原住民でパイワン族の詩人、モーナノンは「私たちは自分たちの土地でさすらうのをやめたい、まず私たちが名前と尊厳を取り戻し、そして民族教育の権利を取り戻すことができるようにしてほしい」と述べている。

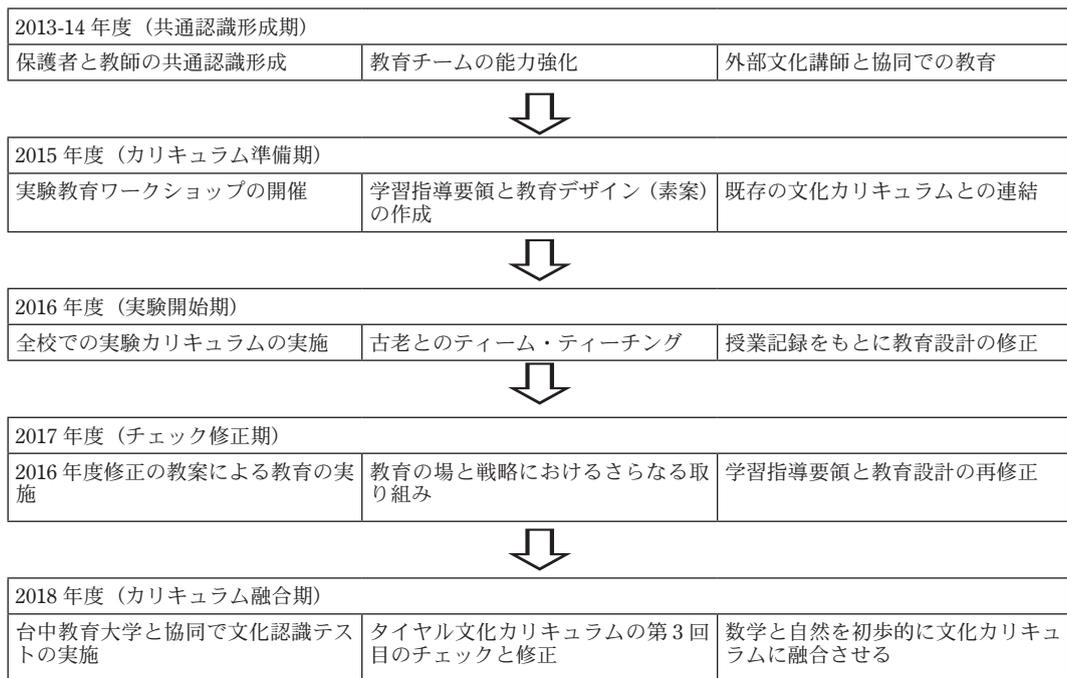
我々は校名を変更することで原住民族の主体性を強調したいと考えた。そこで校内で校名変更

に関する議論を積極的に行い、2年かけて部落の古老やコミュニティの代表に民族を代表するような校名をあげてもらい、校名変更に対するコンセンサスを得るため、4つの部落で公開説明会を開催した。コミュニティの人々に学校の将来的な方向性を理解してもらうため、学区内の保護者全員と住民、児童、教職員が参加する全面的な住民投票方式を採用した。これは校名決定における台湾初の住民投票となった。また、コミュニティや保護者が正名運動に参加することで、学校制度改正の障害をかなり減らすことができた。2年間の取り組みの末、当日の投票はコミュニティ投票が281票、インターネット投票が740票で、延べ1021人が投票した。結果はP'uma(博屋瑪)が64.31%、Khu(葛護)が16.28%、Penuh(北努乎)が17.52%となった。

### 第3節 カリキュラムの発展

#### 1. 実験教育開始の目的

2015年以前は、学校のタイヤル文化カリキュラムは付帯的なものであり、実際は技術、芸術および言語に偏っていた。総合的なカリキュラム設計と継続的な計画に欠けており、その結果、児童は細切れの文化的知識しか学ぶことができなかった。そこで我々は「今日やらなければ明日にはタイヤル族がいなくなる」と訴え、学校の教職員たちが一丸となり、子どもたちをタイヤル的な考え方、タイヤル魂を持つ全きタイヤルに育てるよう切望した。感動と共感、そして子どもたちがよりよく学べるようにしたいという学校側の気持ちによって、教員たちが「今やらずにいつやるのか」という使命感を持つようになり、全校職員が積極的にタイヤル文化を主軸とするカリキュラムの開発に取り組んだ(カリキュラム開発の過程については、図1参照)。

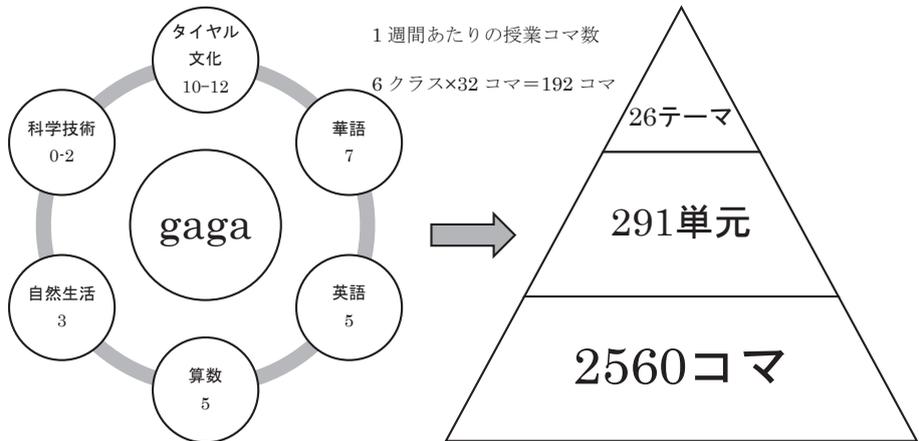


出典：筆者により作成

図1 ポウマ小学校におけるカリキュラム開発の過程

## 2. 実際のカリキュラムと特色

ポウマ小学校（台中市博屋瑪国民小学）のタイヤル文化カリキュラムは、正規のカリキュラムとして既存のカリキュラムの5つの領域を残したほか、社会、芸術文化、保健体育、総合などを新たに組み直し、当校専用のタイヤル文化カリキュラム（毎週10-12コマ）に仕上げた。カリキュラムは主にテーマ型の教育であり、タイヤル族のgaga<sup>〔訳注 iii〕</sup>を中核として26のテーマ、291単元を1シリーズとする教育設計とした（図2参照）。タイヤル語と中国語を主な教育言語とし、児童がおかれた社会的文脈のなかで自然に民族語に接して学べるようにした。また、授業はティーム・ティーチング方式を採用し、校内の教員のほか、知識に精通している部落の古老や文化人など多くの人に授業を依頼し、かつ民族語による教授を勧めた。そして学習の場を室内から屋外へ、教室から部落へと移すことで大自然に学び、児童の「体験による学習」（Learning by Doing）<sup>〔訳注 iv〕</sup>と土地に親しむ態度を重視し、最終的には真のタイヤル人となることを目指す。



出典：筆者により作成

図2 ポウマ小学校6大カリキュラムと学習テーマ・学習単元・授業コマ数との相関関係

## 3. ポウマ小学校の6大カリキュラム

ポウマ小学校のカリキュラムは、下記の7点の方針に則って設計された。

(1) タイヤル族の知識体系を主軸とした民族教育カリキュラムを構築し、それを積極的に民族実験小学校に転用する。タイヤル族を核とし、カリキュラムの計画と教材設計の主導権をタイヤル族の価値体系へと取り戻し、「タイヤル民族教育学習指導要領」へと発展させ、文化の主体性を促進する。

(2) タイヤル文化の生活のリズムに合わせたカリキュラムを実施する。学校の時間割は1週間の形式で、午前是一般カリキュラムの学習、午後はタイヤル文化カリキュラムである。また、必要に応じて授業時間を調整することがある。例えば5、6年生の狩猟をテーマとしたカリキュラムでは、実際に狩猟に出かけるのに1-2日必要である。

(3) 文化を主題としたテーマ型カリキュラムで科目の垣根を克服する。ポウマ小学校のタイヤル文化カリキュラムは「テーマ型学習」に基づき設計されており、児童に実践、体験、探求の学習経験と自学自習の空間を与えることで、学際的な統合能力と学習の興味を向上させるのに役立つ。

(4) 「体験による学習」は学習と生活体験の結合に重点を置く。「12年国民基本教育課程綱要」(学習指導要領)の核心となる基礎的能力、「努力して実践することを通じた」学びは「体験による学習、学習による体験」の特徴と図らずも一致する(教育部2014)。

(5) 文化と呼応する科学カリキュラムでは、科学的テーマを巡り原住民と西洋一般の知識体系を統合する。学校は、学生が経験の世界から得た信念や技術、理解を全体として認めて結び付けるべきであり、これを無視したり置き換えたりしてはならない(Stephens 2000)。ポウマ小学校ではテーマ型の統合カリキュラムと領域を超えた学習によって、タイヤル族の科学的知識を1つ1つ採集し記録し、自民族の視点から設計したタイヤル民族小学校の科学カリキュラムと教材を開発する。

(6) 自発的なカリキュラム改革は教師の「教え」と「学び」を啓発する。児童が学びを好きになり、学びに情熱を感じ、学びのなかから自身の興味を見つけ、自文化を知るようになる。そして自信が持てるようになる、というのが全教職員の信念である。このような共通認識を持ったうえで、学校側は2013-2017年の民族教育能力研修を計画し、タイヤル民族実験教育ワークショップを立ち上げた。カリキュラム計画と教育実践においては、教師と各領域の専門家や研究者、部落の古老、文化工作者に討論や対話、ティーチング・ティーチングを行うよう勧め、教師の民族カリキュラムにおける文化知識(CK)と民族カリキュラム転換能力(PCK)を高めた<sup>[訳注v]</sup>。共同学習、野外学習、状況学習、体験学習、サービス学習、課題解決型学習、探求学習など、ポウマ小学校の教師の教育戦略は多様化しており、それぞれの単元と前述の戦略をある程度組み合わせることで、児童をより一層学習に集中させ、創造と振り返りに導き、互いに学びあうことや努力して実践する機会を多く与えるようにしている。

(7) 伝統的知識を教材に転用した。例えば、飲食文化(野菜や果物類)―山菜の食用効果―山菜や野生の果物の効果についての知識(医学、民俗植物)、狩猟文化―獲物の処理―獲物を炭火で乾燥させ、長持ちさせる方法(化学変化)、漁労文化―水と土壌の保全―植生法、農芸法、工程法(生物、植生)、などが挙げられる。

#### 4. 成果と展望

2016年はポウマ小学校の実験教育元年であり、学校でのカリキュラム開発の努力と成果は保護者に認められ、学区を越えて児童を学ばせたいという保護者も出たほどである。生徒の学習意欲が向上したことで、全教職員はカリキュラムを普及させようと信念を強めた。

本校のカリキュラムの理念は、ホリスティックな(タイヤル人の)人間開発と12年国民教育の重点である「素養指向」のカリキュラムや授業の評価を重視している。評価では、例えば、授業への集中度、学習動機、学習履歴と方法戦略など、数字では表せないような非認知的な教育評

価をデザインするよう教師に奨励している（教育部 2014）。ポウマ小学校では児童の学習と理解の過程を重視し、評価はあくまで教師と保護者が子どもの学習上の困難を発見するためのものである。子どもに対して様々な助けや導きを提供し、子ども自身は各段階の課題やステップアップに気が付くようになる。

#### 第4節 カリキュラムについて——文学、狩猟、建築の授業を例として

##### 1. 文学

「タイヤル文学」は「ポウマ小学校民族知識体系」における1つの面であり、学校、古老、カリキュラム専門家と討論した結果、神話伝説、部落の物語、創作文学を重要な三項目とした。

###### (1) 神話伝説

タイヤル族の生活様式と先祖が伝えてきた神話伝説は切っても切れない関係にある。神話は自在でいきいきとした手法で、人と人、人と万物、さらには人と神との関係を簡潔に描写している。それゆえ、神話伝説カリキュラムを通じて、児童が自身の民族文化を身近に感じ、タイヤル文化の理解を深められるよう導くのである。

ポウマ小学校の神話伝説カリキュラムはタイヤル族の発祥の地から始まり、創世神話、移動、居住地地名、神霊観、家族愛、顔のイレズミ、機織り工芸、生活（衣食住と行動）から自然や万物との関係へと続く。神話伝説は祖先が残した物語を訴えかけるものであり、深く掘り下げられ、かつ分かりやすい解説によって、タイヤルの神話伝説の精神を描き出すのである。つまり当時の先祖の生活の様子を覗き見ることができるが、より重要なのは物語が伝える生活の知恵と精神的価値である。物語を聞くことは子どもたちが成長の過程で最も好む学習活動であり、大人も楽しみながら物語のなかから先人の知恵をくみ取り、行動の際の参考にすることができるのである。タイヤル族の神話伝説には人と万物の関係にまつわる多くの物語が登場する。例えば、タイヤル族とサイシャット族の伝説では人がサルやタカになる話がある。これらの神話の共通点は、人と万物は同じ起源であり、万物は単なる動植物というだけではなく、気持ちの上では家族であり、恩人であり、友人であり、さらには先祖だという点である。これは、自然を愛し、万物を育てるという原住民の心情の基礎ともなっている。

そのほか、神話伝説中のタブーについて、タイヤル族は伐採や狩猟を行うが、あくまで生活での需要を満たすものであり、経済的目的ではない。このような生活の決まりをタイヤル族の人々は gaga と呼んでおり、それは「生きるための簡素な生活」であり、現在の物質主義社会にとっては一筋の清流のようなものである。原住民の神話に含まれているエコロジーの知識を総合的に見ると、これらの神話や宗教信仰が何百年も、環境保護において重要な役割を果たしてきたことがわかる。

###### (2) 部落の物語

文字のない原住民の部落では滔々と語り継がれてきた口承伝説が、歴史や文化の重要な軌跡を

記録している。そのため、学校のカリキュラムでは計画的で一貫した指導で児童自らに部落の物語を採集させ、歴史的な記憶を受け継ぎ、部落の物語が意味する文化の内面性を理解させるようにしており、これはポウマ小学校が力を入れている目標である。

ポウマ小学校では、部落居住地の名前の由来に関する物語、家族の移動に関する物語、タイヤル族の移動に関する物語、自然、万物、神霊観、顔のイレズミ、機織りなどに関する部落の物語の採集を徐々に進めている。

6年生の部落の物語の授業で扱う「忠犬 kalux」、「黒イノブタ、危機から逃れる」を例に挙げると、この2つの物語は部落の古老の口述を記録したものであり、物語の採集によって学校と部落の絆が一層強まり、部落の古老はこれにより後世に物語の価値と意義を伝えることができた実感していた。1つ目の物語は人間と飼い犬の深い情を児童に伝えるものであり、感動的な物語によって飼い犬の忠誠心という特徴を理解させるものである。2つ目の物語は部落の人が飼っている雑種の黒イノブタについての話である。飼っていたイノブタたちはかなり野性的で、野性に任せて他人の畑の果樹を食い荒らし、イノブタの主人と畑の持ち主との間でいざこざが起きた。解決の話し合いで賠償の約束がなされたが、イノブタの飼い主はそれに対して腹立たしさと同時に可笑しさも感じた、という物語である。物語の主人公はこの特別な飼育経験を語り、物語の記録者は「黒イノブタの脱獄計画に3万円の賛助」というユーモアたっぷりの比喩を用いてそれを記録した。

このカリキュラムは部落で起こった物語を部落の視線で記録するものである。部落の物語は児童が育った環境や生活経験と密接な関係にあり、児童にとってはより面白く感じられ、共鳴しやすいのである。

### (3) 創作文学

タイヤル族の文学作家は多くいるが、学校の国語の教材は漢民族作家のものが多く、児童にとってタイヤルの作家を知る機会はなかなかない。そこで、創作文学のカリキュラムは以下のようにしている。大安溪系統のタイヤル族作家を知ることとその作品鑑賞から始まり、大安溪系統以外のタイヤル族作家を知りその作品を鑑賞すること、タイヤル族の現代文学を知ること、すなわち詩を知ることとその創作や、タイヤル劇を知ることとタイヤルミュージカルの創作、神話伝説以外の口頭伝承文学の理解、タイヤル以外の民族の神話伝説を知ること、タイヤルと他民族の神話伝説との違いの理解、タイヤル文学（散文、小説から報道文学まで）の理解などである。児童が体系的にタイヤル文学の作家を知り、作品を読み、文学創作に興味を持つように指導する。

6年生の創作文学（報道文学）を例に挙げると、報道文学は、部落の歴史を再構築するものであるため、原住民文学において欠かすことのできないパズルの1ピースである。報道文学は「純文学」ではなく、小説や散文と違い、個人の思想、感情あるいは概念や思考を明瞭にするだけでなく社会観察力を養成する。この単位ではまず原住民報道文学の代表的人物である啓明・拉瓦（チーミン・ラワ）を紹介し、報道文学ならびに啓明・拉瓦が報道文学を始めた心の軌跡について映像を用いて児童に紹介する。それから児童に報道文学とは何かを理解させ、関連する刊行物や書籍を紹介し、報道されている人物や事柄から報道文学の真善美を理解させる。

ポウマ小学校のタイヤル文学カリキュラムを総合的に述べると次のとおりである。まずはタイヤル族の神話、部落の物語、創作文学を主軸としたカリキュラムの構築を試み、文化を本質とする主体的精神のタイヤル文学の風貌を伝えることで、タイヤル文学が独自の文化的特徴を持ちタイヤルの大切な文学遺産であることを児童に理解させる。そして児童がタイヤル族の文化的内面性を理解し、児童の民族的視点からの論述能力を養い、自民族に対する自信と尊厳を確立することを目指す。

## 2. 狩猟

### (1) 狩猟文化カリキュラムの設計理念

かつてのタイヤル族は、肉類を獲得するのが難しく、そのため山に入って狩りをしなければならなかった。カリキュラムを設計した際は、狩猟文化には自然界の生命を奪うことで自分自身や部落の人々の命をつないでおり、それは大変厳格で神聖なことであると児童に理解させようとした。

低学年の教案は狩猟文化を知ることがを主な目的とし、タイヤル族の伝統である gaga を出発点とし、狩猟の方法や用具について学び、実際に触って体験するということが授業のポイントとしている。

中学年においては様々な罠のかけ方を練習し、その過程でタイヤル族の狩猟に関する伝統的な gaga を学び、古老の体験談から山中での狩りの様々な状況を理解し、獲物を獲りすぎないことや狩りの時期、山林の永続的保持に関する概念や態度について学ぶ。

高学年においては実体験を重視しており、授業はほぼ山に入っていくことが多い。古老と実際に山中で狩りをすることにより、伝統的なタイヤルの狩人がどのようにして自分たちの知識を山林や大自然という仲間に対して生かしているのかを学ぶ。

### (2) 古老と授業との繋がり

実際の体験ほど児童に深い印象を与える授業はない。教員はたいがい、授業を行うとき児童に実体験をさせることを考えて教案を練る。しかし教員のほとんどは実際の狩猟の経験がないため、部落の狩人や関連知識と経験を持つ古老に加わってもらい協同で授業を行う。

教員は授業を行う前に、狩猟文化に関する教案の検討をしっかりと行い、古老にも授業に加わってもらう場合は、授業の2、3週間前から電話や訪問により古老と準備をする。よい学習目標と教育活動を練り、当日に必要な教材などを明確にしておく。

### (3) 狩猟文化カリキュラムの内容

狩猟文化カリキュラムは主に山林で授業が行われる。ポウマ小学校の教員たちは、「万卷の書を読むは万里の路を行くに如かず」と言われるように、実際に狩りを行うことは、教室で教科書の写真や映像を見たりするよりもはるかに効果的で印象が深まるという信念を持っている（各学年の学習テーマと主な授業内容は、表、写真 1-2 を参照）。



写真1：5、6年生の「狩猟に出かける」授業で、簡易な狩猟小屋の設営を学ぶ男子児童



写真2：5、6年生の「狩猟に出かける」授業で、食べられる山菜の取り方や料理を学ぶ女子児童

表 狩猟文化カリキュラムの内容

年次	学習テーマ	授業内容
1年生	狩猟文化の意義	狩猟文化の意義とタイヤル族にとっての重要性を説明する。
	首くり罠を仕掛ける	古老と教師の指導のもと、児童は基本的な罠のかけ方を練習する。実際に手を動かすことで印象に残りやすくなる。
2年生	狩猟の方法を知る	狩猟の方法と道具を理解し、教員が安全管理をしながら児童に道具を触らせたり体験させたりなどの指導を行う。
	ムササビを知る	古老が学校にムササビの標本を持ち込み児童に実際に観察させ、ムササビの外観や習性を理解したあと、児童は美術の授業で自分のイメージするムササビを描く。
3年生	狩猟の道具を知る―竹矢と竹槍を作る	児童が自分で竹矢と竹槍を作り、その使い方について古老と教員の指導を受ける。
	para（キョン）を知る	キョンを知る以外に、屋外で実際にキョンの居住環境を知り、山林の環境には皆の保護の意識が必要だということを学ぶ。
4年生	wewak nnahi（イノシシ）を知る	教員が児童に動物を理解させる際、写真や映像だけでなく、実際にその動物を見られるようにする。そのため、多くの集落の人々や古老との協力が必要になる。
	狩猟の季節の紹介	タイヤルの gaga では、狩りは好きな時に行くのではなく、行ってよい季節が決まっている。現代的な自然科学の知識によって、どうしてこのような決まりがあるのかを児童たちと話し合う。
5年生	狩猟に出かける (5、6年生共通カリキュラム)	1年生から4年生までは基本的な狩りの知識と罠のかけ方を学び、高学年になると実際に山中で狩りを学ぶ。年上の狩人が年下の者に山中で狩りを教えるというタイヤルの習慣に倣い、6年生との1日かかりの共同カリキュラムにおいても、5年生は6年生の先輩たちによる仕事の振り分けや指導によって学ぶ。仕事はほぼ6年生の先輩たちの手伝いである。
6年生	狩猟に出かける (5、6年生共通カリキュラム)	6年生は5年生で狩りの経験をしており、環境や基本的な流れについてある程度理解しているため、教員は6年生が指導者として後輩たちと狩りを行うよう指導する。この授業では1年生から学んできた狩りの知識を生かすほか、6年生のグループリーダーとしての能力も養う。また、屋外では教室に比べると問題解決能力が一層必要とされる。道具や環境のコントロールが難しいなか、任務の達成において児童の臨機応変な対応力が試される。

出典：筆者により作成

#### (4) 狩猟文化カリキュラムと現代的な科学知識の連結

伝統的なタイヤルの狩猟文化を教える際に、伝統文化を理解するほか、現代的な科学知識と連結させてこそ、完全にタイヤル的な観念を持った児童を育てることができる。

狩猟文化の gaga を例に挙げると、教員や古老が守るべき gaga を伝える時、教員はなぜそうなのかと考えるよう児童たちを指導する。例えば女性は男性の狩りの道具に触れてはならないという規則の gaga に対しては、すでに仕掛けられている罠を女性が触ると壊れてしまうとか、うっかり槍や引き金などに触ってしまうことがあるなどということが考えられる。狩りの季節についても、学んだものをひたすら暗記するのではなく、野生動物の習性、生育の背景や季節から理解する。罠の仕掛けやかけ方については、てこの原理と力学の応用であり、罠の仕掛け体験の後に教室で現代科学の授業を行うことで、伝統文化と科学的知識に密接な関係があることを児童に理解させる。

### 3. 建築

#### (1) カリキュラム設計の理念

タイヤル族の環境に関する豊かな知識は、衣食住をはじめ行動、養育、娯楽など、全て山林などの自然の資源に頼るものであり、自然環境との長い交わりのなかで積み上げられてきた非常に貴重な伝統的知識である。

タイヤルの伝統建築もその例に漏れず、異なる生活様式に応じそれぞれ必要とされる建築の外観や技法が存在し、植物利用における環境関連の知識と科学的知識が培われてきた。しかし時代の変化により、タイヤルの伝統建築は日に日に廃れ、コンクリートなどの現代建築にとって代わられており、伝統的知識も消えてしまいかねない状況にある。それゆえポウマ小学校の民族教育カリキュラムはタイヤルの子孫たちにとって祖先の知識を理解する機会になることが期待される。

#### (2) カリキュラム計画の方向性

ポウマ小学校の「建築文化」をテーマとするカリキュラムでは、タイヤル族の様々な伝統建築の種類、建材、機能などを理解するほか、建材を採取・加工し伝統的な工法で建築を行い、環境に応じた生活の知恵であるタイヤルの伝統建築技法を実体験から学習することが目標となっている。

1年生のカリキュラム設計では、子どもたちにタイヤルの伝統建築の種類と機能を理解させ、異なる建築構造における生活での必要性を理解させる。たとえば、穀物倉の本体がかさ上げされているのは穀物を保存するためであり、半竪穴式住居は寒さや動物、外敵の侵入を防ぐためである。

2年生のカリキュラム設計では、建築細部の構造と建材となる木材の種類を理解し、建材の加工技術を通じてタイヤル建築の科学的知識を体験する。

中学年のカリキュラム設計では、伝統建築物の建築工程の手順を理解し、建材の採集と加工、建築方法など初めての体験を通じてタイヤルの伝統建築を理解する。

高学年のカリキュラム設計は、低・中学年で学んだ知識を総合的に使い、実際に家屋、穀物倉、見張り台などの模型を作ることで、児童が伝統的な建築工法やそこに含まれる物理の知識をさらに学べるようにしている。

### (3) 建築と教科との連結、ならびに実際の授業の状況

カリキュラム実施において、タイヤルの伝統建築の構造と環境適応の関係について子どもたちに話してもらうよう、学校から古老に依頼している。例えば、半竪穴式住居は外敵や動物の侵入を防ぐほか防寒の効果もあり、これは建物が地下にあると冷たい空気と触れる面積が少なくなり保温効果が高まるという科学原理と結びつく。また、k'hu (タイヤルの穀物倉) が高床式であるのは山地の湿気の多い気候と関係があり、穀物が湿気で傷むのを防ぐために、穀物倉の床を高くすることで穀物が地面の湿気と直接触れないようにする、つまり空気の対流という物理的原理が、倉のなかの穀物の乾燥を保つのである。そのほか、柱が貫いているネズミ返し構造は、ネズミが穀物倉に這い上がり穀物を食べるのを防ぐためであり、そこから推測できる物理現象はネズミが柱を伝って上る際の着力点が切り離され、ネズミが穀物倉にたどり着けないようになっているということである。このようなカリキュラムから、タイヤル族の伝統建築の構造は自然科学と繋がっているということが見て取れる。

児童はタイヤルの建築構造と環境の関係を理解した後で、実際に古老から小型の竹小屋や穀物倉、見張り台の作り方を習う。「タイヤルの竹小屋の建材と加工を知る」の学習単元では、まず古老が子どもたちを山に連れていき家屋の梁や柱の材料を教え、柱にする木材の乾燥を保ち腐りにくくするために、先に刀で樹皮を削ることを説明する。この授業では、教員は樹皮を削るという伝統的工法と防腐や防虫との関係に関する科学的原理について考えるよう子どもたちを指導し、科学的な視点からそれについて述べさせ、木材の含水率と防腐の関係についての応用的な科学知識を理解させる。

次に、「家の建築手順を理解する」の学習単元では、古老が smi mu'iy (竹の屋根) の葺き方について説明する前に、まず竹をそれぞれ半分に分けて節を取り除き、それから屋根を葺き始める。古老は半分にした竹にも特定の名前があることと葺き方の順序を詳しく説明する。まず切り口を上にした samaw (下丸の竹) をいくつか並べ、細く切った竹を下丸の竹の切り口に通しそれを固定する。それから竹のもう半分側の kulup (上丸の竹) を下丸の竹に被せ、交互に重ねる。古老は、このような屋根の葺き方は雨水が下丸の竹に沿って流れる排水機能があり、上側の上丸の竹は下丸の竹の隙間に重ねるため雨漏りを防ぐ機能があると説明する。続いて古老は、昔のタイヤルの人々は屋根の雨漏り防止を強化するため、屋根の上を乾燥させたススキで覆っていたことを説明する。その葺き方は乾いたススキを束にし、束の頭は上側の高い方に、束の下は下側の低い方に向ける。そうすることで雨水がそれに沿って流れるのである。

建築過程に関わる科学的知識以外に、タイヤル族の家屋の手入れにも一定の方法がある。また、古老は授業の際、伝統的な家屋の内部には必ず三角のかまどを設置することを児童に紹介する。かまどは煮炊きや暖を取る以外に、煙を利用し屋根の竹を燻すことで乾燥や防腐の効果も持つ。

以上のことから、ポウマ小学校の児童は、祖先が利用してきた環境資源に関わる自然科学の知識をこの建築文化カリキュラムを通じて理解し、伝統建築技能における物理科学についても知ることができるようになっていけると言えるだろう。

## 第5節 我々の変化

### 1. 児童の変化

ポウマ小学校のカリキュラムの目標は、児童の変化を目標にしている。子どもたちが自分の文化を理解し、アイデンティティを感じるだけでなく、よりよい学習をさせて動機付けをし、学習への熱意を起こして学習能力を高め、多様な可能性を広げることにある。2016年のカリキュラム実施から現在まで、カリキュラムの変更によって子どもたちが楽しく学びながらその能力を向上させたことが教員たちにもわかり、自らの輝きを発見した児童の笑顔は、教員たちにとっても新たなカリキュラム作成と修正への情熱となっている。

現在もポウマ小学校では教員と児童が変化の過程にあり、児童はより学習を楽しんで自主的に勉強し、文化的な環境において、自分の興味や得意なことを徐々に理解してきており、同時に民族文化やその学習に対する児童の自信も強化されてきている。そして児童の変化はカリキュラムをより発展させるという教員の自信をも強めた。教師の情熱は児童の変化により火がつけられた。カリキュラム変更の過程では多くの不確定要素があったが、ポウマ小学校の教員にとっては、これは自分が活性化する試練とチャンスであり、希望が大きければ大きいほど力も強くなるのである。また、民族実験教育を根付かせるために、我々にはさらなる努力が求められるが、共通の信念に基づき、学ぶ気持ちと開かれた心を持って取り組む決意があれば、子どもたちを必ず素晴らしい未来へと導くことができるであろう。

### 2. 教員の能力と雰囲気

ポウマ小学校のカリキュラム改革前は、教員は担当領域の授業準備と実際の授業をするだけで、様々な民族や地域の子どもたちを進歩させるカリキュラムがどんなものかということも考えたこともなかった。校長がタイヤル化したカリキュラムという理念を打ち出してから、教員もそれについて考えるようになった。

カリキュラム改革当初は、皆が不安を持ちながらカリキュラムの全体像を模索したが、様々なリソースやネットワークや専門家の協力に加え、教員も積極的にフィールド調査やカリキュラムの修正を行っていくうちに、徐々に「タイヤル化カリキュラム」というものを把握できるようになってきた。

カリキュラムの開発過程では、古老に質問したり学んだりする教員たちの機会が増え、それによってタイヤル文化の知識を豊かにすることができ、民族言語のカリキュラムへの取り込みの能力も向上した。しっかりした準備ができる体制のもとで、教員たちのカリキュラム設計能力のさらなる向上や、文化と現代的な知識のつなげ方の上達に加え、伝統的な知恵を学校のカリキュラムに適応させることも十分できるようになり、ポウマ小学校の児童の学習を導く能力がついた。

実験教育制度への移行前は、教員たちはそれぞれ自分の担当領域に責任を持つという前提のもと、互いに専門的な話し合いをすることはほとんどなかった。しかし、準備期間を経て正式に制度移行してからは、教員たちは古い概念と「先生王国の壁」を打ち破らなければならず、ともに

協力しながらカリキュラム設計を行っている。

教員たちは共同の理念と目標を持つことができたゆえに、孤独な戦いをするとはなくなり、ともに働き、ともに楽しみ、ともに栄える運命共同体となった。カリキュラム設計から編集と修正、授業準備や授業まで、教員がともに手を取り合いフィールド調査や文献による考察を全力で行い、授業準備中もカリキュラムに対する意見を惜しみなく出した。実施の過程では、資料を探したり、カリキュラムの相談に乗ったり、カリキュラムを映像で記録したり車で送り迎えをするなど、教員同士で何か困ったことがあったときは、皆が全力で支援した。こうしてポウマ小学校の教員チームは、一丸となり、ともに働き、ともに楽しむというタイヤルの gaga を自然に作り上げることになったのである。

ポウマ小学校の教員チームは、ともに働くタイヤルの gaga (社会組織) であり、民族の伝承に共感するという理念を持つゆえに皆が協力しあった。このチームはともに楽しむタイヤルの gaga であり、互いを大切にするゆえに皆が惜しみなく分け合い、互いを支えあった。そしてこのチームは、ともに栄えるタイヤルの gaga であり、自分たちが生命共同体であるという感情によってチームは自然に大きくなり、皆が袖を捲り全力で前に進もうとしている。それゆえ情熱、積極性、分かち合いはポウマ小教員チームの最善の姿なのである。

### 3. 保護者の変化

2014 年に「実験教育三法」が採決されてから、ポウマ小学校は台湾初の原住民族実験小学校となった。実験教育の最も基礎となる根源は保護者と児童が自由に適切な学校を選ぶことができ、かつ学び方を習得できることである。

ポウマ小学校の 9 割の保護者と子どもはタイヤル族だが、現代社会では、タイヤル語や伝統文化が家庭の日常生活にほとんど登場せず、子どもたちの多くは自己の文化である gaga の精神を徐々に失いつつあり、保護者の文化に対する共感も徐々に失われつつある。文化を途切れることなく伝承するために、我々は何かしなければならぬと考えた。

民族教育の実施は、文化に対する子どもの認識を養う以外に、保護者の考えや子どもに対する教育観に影響を及ぼすことができると期待される。もちろん実験教育開始当初は、実験教育に参加する自分の子どもが実験台になるのではないかと、卒業して一般の学校に進学すると授業の進度や環境などに適応できないのではないかなどの心配をする保護者もいた。様々な要因があり保護者たちは疑問を抱き、学校側としては保護者に実験教育移行の目的を理解してもらうよう求めなければならなかった。そこで、学校では保護者会や保護者と教員の話し合いの場を利用し、保護者が安心して教員たちの教育に賛同してもらえるよう、学校の民族カリキュラムの計画や実施の方向性、学習の将来的な方向性について理解を促した。「学校との意思疎通」から「保護者、教員、児童 3 者の共通認識」までが出そろってこそ、民族実験教育がスムーズに行われるのである。

2 年間の努力を経たある日のクラスの保護者会で、保護者がこのように言い出した。「ポウマ小学校が実験教育を始めたことで私の夢はかなった。テレビのない家を実現し、子どもにご飯を

作ってあげる時間ができ、子どもと一緒にいる時間も増え、子どもたちの成長に真の意味で寄り添えることを考えると、本当に感謝している。そして自分も部落のなかで介護活動に取り組むという夢を叶え、介護サービスの質を上げる機会に恵まれたのは本当に嬉しいことだ。自分の夢を叶えてくれた以外に、ポウマ小学校は大変豊富な読書環境や教育リソースを提供しており、我が家の3人の子どもたちも読書が好きになり、本当に喜ばしい」。

もっと興味深かったのは、別の保護者の感想だった。「私は小さいころから都市で育ってきて、タイヤル文化に触れたことはなかった。自分がタイヤルとは知っていたけれど、タイヤル族の文化を受け入れることはできなかった。ある日子どもが肉の塩漬けの授業でアワを使う肉の塩漬けの作り方を学び、肉の塩漬けを食べるのが好きだと私に伝えた。でも私たち母子はそれが原因で大喧嘩をした。その時子どもが『タイヤル族はみんなそうなんだよ、肉の塩漬けを食べない人はタイヤル族じゃない』と言うのを聞き、私はそれから徐々にタイヤルの文化を受け入れるようになり、自分も子どもとタイヤル語を話したり、一緒に勉強したりするようになった。当初の反対する気持ちから今の共感に至り、今は子どもがポウマ小学校に通うことに全く不安はない。というのは、私も子どもと一緒に勉強ができ、これは私にとってとても幸せなことだから」。

観察、学習、再創造という過程を経て、子どもたちは無限の知識を得ることができる。学校で実験教育を行うことで、保護者の教育観が変化し文化に対する学習意欲が向上するのを、我々も目の当たりにした。そして最も重要なのは保護者自身がタイヤル族であるという誇りと gaga の精神を取り戻したことであり、だからこそ、我々が保護者の変化を目の当たりにしたと言えるのだ。

我々は教師として、保護者に対して子どもたちを学校に行かせればそれでいいのではなく、必要に応じて子どもたちの学習状況を気に掛けるよう常日頃から注意するよう促している。結局はどんなに教育環境が良くても、保護者のサポートがなければいい結果を出すのは難しい。それゆえ「保護者は子どもの成長に寄り添う準備ができていないか否か」ということは非常に重要である。

#### 4. コミュニティ・部落の変化

原住民部落では学校とコミュニティ・部落は切っても切れない関係にあり、学校行事であれコミュニティの行事であれ、部落では必ず共同で開催することになっている。ポウマ小学校も同様に、学校とコミュニティの関係をさらに深めパートナーシップとして活用している。以下、ポウマ小学校の制度移行後に、学校とコミュニティにどのような影響や変化があったかを例に挙げる。

##### (1) 学習空間の拡張

タイヤル文化カリキュラムの必要に応じ、多くのテーマは教室以外の場所で教えられ、教育の場はコミュニティ・部落へと広がっていった。例えば「アワ文化」というテーマがあるが、学校のアワ畑は部落にあり、アワや裏作の作物は部落内のアワ畑に植えられ、そこで授業が行われている。「食文化」の授業では、肉の塩漬けや山菜料理を作る際にコミュニティの厨房を使用する。また、有用微生物肥料を作るときは厨房の職員たちが嬉しそうに児童に作り方を指導する。「部落産業文化」の授業では、児童をコミュニティのなかに位置する自家農園で採れたコーヒーを自

家焙煎で提供する「pitu カフェ」に連れていき、部落のコーヒー産業について理解させる。そこでは児童は直接コーヒーの木を見てコーヒー豆に触れ、コーヒーの香りを嗅ぎ、コーヒーの淹れ方やラテアートなども体験しながら学べるようになっている。児童が自分で描いたラテアートのコーヒーを飲む時の喜びに満ちた達成感は、教室で写真を見ただけで得られるものではないだろう。

また、「織り姫の夢」というテーマでは、ほかの部落の工房と協力し、工房の先生に学校に向いて授業を行ってもらおうほか、児童を工房へ連れて行き、苧麻畑や工房内に保管されているタイヤル族の伝統的な織物を見学する。

「狩猟文化」や「植物」の授業では、実際に児童を部落のシマオオタニワタリ（山蘇）が生い茂る林に連れて行って授業を行い、罌の作り方や獲物の足跡や住処の見分け方、黄籐やクワズイモ、イラクサといった山中の様々な植物など、環境に関する様々な知恵が部落の山林に存在することを理解させる。コミュニティにある豊富な資源は、児童の教育にとって大変役に立つ教材なのである。

教育の場が変化した以外に、コミュニティの古老が学校教育のパートナーとなった。箆や背負い籠やおもちゃの作り方、口琴の演奏、タイヤルの竹小屋の建築工法、呪術文化など、カリキュラムによっては古老の知恵を借りることが必要である。また、古老あるいは部落の人々による説明以外に、児童が自ら古老たちのやり方を見て自分でも手を動かすことが、学校の目指す「体験による学習」と「学習による体験」の教育理念である。部落の人々に学校で授業をしてもらうことは、学校側のメリットになるだけでなく、部落の人々にとっても文化伝承の過程における達成感を強く感じられるほか、臨時収入にもなるのである。

## (2) 絆を強める

ポウマ小学校は台湾初の民族実験小学校であるため、しばしば外部の団体が学校参観に来たり、助けを借りて校内で催しを行ったりすることがある。例えば、東勢林区管理处とポウマ小学校が合同で原住民の伝統植物を再び育てるための植樹祭を行った。これは全校児童と教員以外に、コミュニティの人々も参加するという大変意義のある催しとなった。また、5月の母の日は、学校で盛大なお祝いを行ったが、これも部落の人々が必ず参加する催しで、児童も教師も保護者が熱心に参加する姿を見て心が和み喜ばしく感じている。

学校では催しの開催によって、コミュニティ・部落との絆を強め、人々の学校に対する共感や愛着もさらに深まり、学校の催しに気前よく寄付をしてくれる人もいるほどで、このことから学校への共感が見て取れる。

## (3) 学校とコミュニティの文化資本の蓄積

母の日などの校内での大きな催しの時は「学習発表会」を同時に行うため、来校者は児童たちの普段の文化学習の軌跡と豊かな成果を見ることができるとともに、学校経営への熱意やタイヤル文化学習へのこだわりを感じてもらえることができる。

このほか、学校では、劇や歌、朗読などの形をとって「校内・コミュニティ民族語コンテスト」を行っているが、これは単なるコンテストではなく、コミュニティと学校をあげての自文化の維

持・伝承なのである。このような豊富な文化資本は、学校とコミュニティ双方の努力により保たれており、部落のなかだけではなく外の人々にも我々の美しい文化を知ってもらうことが必要である。そのため学校側も必要に応じてマスメディアを通じ学校についての周知を行い、ポウマ小学校のみならず学校のあるコミュニティ・部落も皆に知ってもらい、多くの人に来てもらって理解してもらうよう努めている。これにより学校の知名度が上がるばかりではなく、コミュニティ・部落にとってもある程度の経済的効果が期待される。このことから学校と部落はある種の共生で経営されていると言えるだろう。

#### (4) 思考と実践の刷新

ポウマ小学校のカリキュラムは豊富で多元的であるばかりではなく、校内の景色もそれに引けを取らず美しい。校内には部落の芸術家自身による芸術作品も数多く設置されている。子どもたちは美感にあふれる校内で授業を受けており、それはある種の精神的成長と心の洗濯になっていると言えるだろう。しかも芸術は単なる芸術ではなく、タイヤル族の神話の要素を含んでおり、学校は出入り自由なため、子どもたちもコミュニティの人々も常に美しい芸術作品を楽しみ、そこから自己の文化を学ぶこともできるのである。

ポウマ小学校とコミュニティ・部落の関係はよいパートナーであり、仲の良い家族と言える。互いに助け合い、面倒を見、ともに成長し、互いを誇りに思う。それは最良の文化的資産を我々の子どもたちに伝えるためであり、校内のみならず、コミュニティ・部落全てが最良の学習の場となっている。部落の古老や人々も我々にとってはかけがえのない学習教材であり、わざわざ外に求める必要はない。なぜなら、最も豊富で最も美しいタイヤル文化の知恵は自分たちのコミュニティ・部落のなかにあるからだ。

## 第6節 ポウマ小学校の成果と将来の展望

### 1. 成果

各領域で学習の効果が見られ、児童が自信をつけるなか、「教育部補救教学測検系統」や2016年の「TASA 測検」の結果を見ても学力の向上が見られる。去年のTASA(台湾の学生学力達成度)の公表された成績によれば、数学の全国平均が52点、台中市が56点で、ポウマ小学校は76点であった。国語も全国平均より高い78点であった。

8割以上の児童が学校に来るのが好きで、7割近くの児童はタイヤル文化の授業を好んでおり、ほかの科目への興味も明らかに増加した。ある朝、児童の母親から学校に電話があった。病院へ行くため子どもを休ませようと思ったら、泣いて学校に行きたがったそうである。事情を聴くと今日はタイヤル文化カリキュラムで罾の仕掛け方や狩猟をテーマとした授業があるから休みたいかないということで、母親は怒りながらも可笑しかった、と言う。

また、保護者や教員の9割近くがカリキュラムや児童の学力向上、実験教育のサポートの面で満足している。「タイヤル族の子どもたちがこのように生活のなかで学び、自然に自己の文化を伝承できることは涙が出るほど感動的だ」という伝言がインターネット上にあった。本校はコミュ

ニティ発展協会の理事長や達観里（学校所在地）の里長からも良い評価を得ており、大いに期待されている。

もとの児童数は50人であったが、民族教育推進後は近隣の苗栗県の保護者からも賛同を得て、20人以上の児童が転校してきた。2016年度には児童数が73人まで増加した。保護者の教育選択権により、東勢から山間部の本校に毎日通っている児童もいる。

そのほか、児童はアメリカ、イギリス、オーストラリアなどでタイヤル文化に関する公演を行い、自分を表現しようとする姿勢が見られた。また、台湾では国家音楽ホールで口琴を中心とした公演を行い、児童は民族により誇りを持つようになった。

全校の9割の児童が、自分が原住民であることを好ましく思い、自文化にアイデンティティと誇りを感じている。ポウマ小学校では皆が自文化に自信をもっている。このようなアイデンティティは教育の最も根本的で重要な要素であり、数々の感動を生む原動力となっている。

## 2. 将来の展望

ポウマ小学校は今後、次の5点を推進していくことを展望している。

- ① 全台湾のタイヤル民族学校を将来的にスタートさせるための準備として、「タイヤル知識体系」を構築し、知識を分かち合い、流動させられるようなタイヤル伝統データベースの揺籃とすることを目指す。そして、台湾全土での民族実験教育の参考となるよう努めたい。
- ② 全国の民族小学校推進関係者に自信を与え、結果を生み出せるようにする。ポウマ小学校はまさにMaga Atayal（真のタイヤル）の実現を可能とし、タイヤルの伝統文化と現代の知識をつなげる民族小学校を育む。
- ③ 民族実験小学校の成功により、台湾の民族教育政策の変化を促すことができる。本物の「民族小学校」の設立は、多様な教育形態や民族の尊厳を台湾に根付かせ、原住民に対する健全な教育体系を発展させる。
- ④ 台湾人の原住民に対する認識を再構築し、さらに一歩進んで尊重、包容、共生、共栄を目指す。民族教育文化の推進は歴史的な潮流であり、メインストリームであることを国全体に正面から見つめさせるのである。
- ⑤ 台湾はオーストロネシア語族発祥の地である。ポウマ小学校とオーストロネシア語族の国の学校が姉妹校として提携を結び、文化や教育を通じて国際交流を行い、原住民児童の国際的視野が広がるよう努める。

### おわりに——タイヤルの第一歩は原住民教育の大きな一歩——

教育は、もはや知識の詰め込みではなく、子どもを主体としたものである。子どもたちに合わせたオーダーメイドの教育方法こそ、子どもたちに興味を持たせて能力開発ができるのである。異なる文化を持つ民族がその文化を表現するチャンスを持ち、あまねく民族教育の花を咲かせることができるように、子どもたちが互いに学び、尊重しあうことができるようにするべきである。

また、原住民児童は、母語を通して自身の文化を理解することにより文化的アイデンティティを高め、文化の存続という使命において力を発揮することができるようになるであろう。

民族伝統教育は過去の教育ではなく、ルーツから出発する学びであり、自分を知り自我を完成させる学びであり、真の全人的な学びである。教員の専門的な導きにより児童は自分の文化を学び、さらに文化により学びに呼応できるようになり、そして主体構造の学習モデルへと至るのである。ポウマ小学校が行っているのはまさにこのような教育である。子どもたちが自信を持ち、楽しく過ごし、共感し、分かち合い、ともに学ぶなかで成長していく場所なのである。

山中の風、雨、雲、木、草原、溪流、リス、落ち葉、石、これらはすべて無数の教室、教材であり、全てが生徒であり、先生である。目、耳、鼻、さらに皮膚までも、すべて最良の教師である。

Atayal na balay lu Kinya lyutux na Atayal (タイヤルの魂を持つ本物の人間になる)。

我々の目標と願いは、児童を真のタイヤル人として育て、タイヤルを根本となし、地元の素材を主体にして、地元の文化を中心としたカリキュラムを発展させ、タイヤルの誇りを示し、世界に向かっていくことである。

今日やらなければ、明日にはタイヤル族がいなくなる。これがポウマ小学校チームの共同の使命なのである。

---

#### 訳注

- i 本文中では、台湾で一般的に使われる「原住民」(オーストロネシア系先住民)、「部落」(ある程度の自律性と社会的機能をもつ原住民の村落)をそのまま使用する。
- ii 現在の台湾の法制度上で「原住民族」という語は、先住性に基づく集会的権利の主体であることを含意する。そのため「原住民族委員会」「原住民族教育」「原住民族学校」「原住民族実験小学校」などをはじめとし、この語を筆者の用法に従いそのまま使用する。
- iii 共通の規範を守るタイヤルの伝統的な共同体およびその規範。
- iv 教育哲学者デューイの主張。
- v CKは content knowledge、内容知識。PCK (pedagogical content knowledge) は教育学者 L. ショーマンが提起した概念で、PK (pedagogical knowledge、教育法の知識) と CK が融合したものを指す。

#### 参考文献

- 教育部 2014 「十二年国民基本教育課程綱要 総綱」『行政院公報 第 020 卷第 227 期 20141128 教育文化篇』台北：行政院公報編印中心 ([https://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/87/pta\\_18543\\_581357\\_62438.pdf](https://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/87/pta_18543_581357_62438.pdf), 2020 年 4 月 19 日最終閲覧)。
- STEPHENS, Sidney 2000 *Handbook for Culturally Responsive Science Curriculum*, The Alaska Science Consortium and The Alaska Rural Systemic Initiative. (<http://www.ankn.uaf.edu/publications/handbook/handbook.pdf>, 2020 年 4 月 19 日最終閲覧)。